

# 一番茶句会報

2018 平成三十年  
五月 月号  
号 (592)

## 浅間神社と賤機山桜狩

坂本 操子

廿日会祭を控えた浅間神社を訪れた。境内の桜の下には出店が生まれ並んでいた。楼門の際に観阿弥の碑がある。観阿弥は浅間神社の舞殿を踏んだ五日後に逝去された。

花の下祭りの露店並べ組む

神池に稚魚の生簀や桜散る

木瓜赤し大鯉群るる池の端

境内に組む大舞台春祭

あえかなる左近の桜葉の小さし

観阿弥の終の舞台碑飛花落花

神社の西隅に四本の大銀杏がある。その根元に筆塚、印章塚、花塚、針塚が並んでいる。その傍の石段を登ると賤機山古墳に着く。横穴に石棺が安置されている。円墳の一面は笹ばかり、丸刈にされた笹が芽を吹き虎杖の赤い芽があちこちに見え裾にすみれが群れ咲いていた。奥の院は桜の真盛り。「桜咲きらんまんとしてさびしかる」綾子師の句を口遊み大いに共感した。俳句は凝視してその感動を表現する詩である。

奥宮に桜散りつく静寂かな

しばらく登ると熊笹が群生していた。白い縁どりが太くあざやかで青々とした美しい広葉に感動した。その美しさはこの時期特有のものと思った。

熊笹の縁きはやかや木の芽どき

其処は静岡市を見渡せる地点。白く広がる町並に霞がかかって幻想的だ。真下に城北公園の花時計。桜の囲むグラウンドで少年達が野球をしていた。山桜や染井吉野が満開で今しもこぼれんばかりだ。

「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」虚子。大家の句に学ぶ。高台に四阿があり花見の人で賑わっていた。崖には野苺の花が咲き乱れていた。突然鳥の音が頭上を走った。

野苺のなだれ咲く崖覗きもし

初音かなホーをはぶきてケキョケキョキョ

切り株は吾が見席鳥の楽

高台の四阿占むる花見人

四阿に憩ふ夫婦や百千鳥

背丈越す満天星つつじ崖縁に

やと頂に着いた。ここは桜の苑だ。山桜は散り始めていた。東側は日本平や伊豆半島、西側は安倍川に添って郊外が広がっている。

戦時中、墜落したアメリカ兵や戦災で亡くなった人を供養して救世観音を建ててある。平和を祈って掌を合せた。

観音に香煙絶へぬ桜どき

頂の救世観音花明り

桜狩賤機山を登りきる

桜につられて賤機山の頂上まで登れたことは嬉しかった。句は足許にあると言います。身近な処に四季折々の発見があります。楽しんでながら句材を求めて登って見ませんか。

・・私の好きな句・・三月号より・・

大村 泰子

長閑けさや声のやさしき能登訛

退院の夫へひひなのちらし鮓

SLの煙呑み込む春の山

古民家の狭き土蔵や吊し雛

リズムよく捏ねるパン生地春近し

漆畑 一枝

神尾 知代

磯田なつえ

下河辺美乃里

小林 智子

もちの実句会

No. 555

H・30・5・19

大富士や桜蝦干す河川敷

磯田 秀治

鴉追ひ桜蝦干始まりぬ

馬の子に声かけ行くや鉄線花

青空の群れに加はる巢立鷺

蚕豆の莢に残れる日の温み

雷鳴に動じぬ夫の高軒

地方紙にくるみ筍届きけり

故郷の山を四股名に五月場所

山笑ふ釣竿肩に急ぎけり

昭和の日旗屋の軒に国旗立つ

夕焼窓夫に養ふとろみ食

柿若葉夫の柩へ旅帽子

小判草数本残し刈られけり

近づける指に構へり子蠅螂

次々と糸引くやうに子蠅螂

母の日の母に母めて文届く

抜けし齒のなんと大きや新樹光

眉引けば卓の硝子に庭若葉

(山本法子報)

瀬名笹百合句会

No. 422

H・30・5・21

串まつり行列並ぶ四月尽

大石ひさを

年波を消すほど嬉し春の山

焼酎で二人静かに話す夜

母の日や形見の詩集ひととき

風薫る路面電車の石畳

棚田みな溢るる日差し聖五月

漆畑 一枝

あじさいの小さき花芽雨催ふ  
春筍むけば一寸程なりし

大森 弘子

新緑の覆ふ朱塗りの濃き社殿

溪流の岩にはりつき河鹿鳴く

聖五月少女奏づるハンドベル

日暮れまで巢作り励む燕かな

かをりごと束ねて露のみやげかな

たはむれて孫と寝ころぶ夏の芝

青田風幼き稲を意のままに

分譲の売地に伸ぶるねぢり花

伊吹晴れ植田広がる伊賀の里

樟若葉社につどふ献茶会

(松本恵子報)

安西句会

No. 345

H・30・5・6

茶摘女の赤き手甲色褪せて

佐藤 博子

こだませる祈禱の太鼓若葉山

三陸の若布みやげに柚訪へり

楽の音やひとつばたごの花の下

立川まさ子

落成の放送局や桜どき

さ緑の若葉の艶や高野榎

春愁や施設入所を父に告げ

辻 桂子

恙なく還暦迎ふ豆御飯

茶の町に才取り走る夏の朝

するすると蜥蜴隠るる石祠

囀や子らの鳩笛気ままなる

片蔭を軽やかに行く女車夫

橋本 紀子

子の寮へ坂多き道白薔薇  
 サングラスの婆いぶかしむ赤ん坊  
 黒メダカはらの卵の玉光る  
 竹林の大きうねりや青嵐  
 夏きざす土蔵の窓の半開き  
 これ以上廻れぬ早き風車  
 沖よりの波尖り来る穀雨かな  
 ひとところ欠けたる土器や花の冷え  
 紅界に飴色の竹黄てふてふ  
 藤波へゆるりと母の車椅子  
 花は葉に杖つきて娘が退院す  
 首輪失せ悄然として恋の猫

はとり句会

No. 324

H・30・5・11

(佐藤博子報)

日章旗つつじの庭に翻る  
 ゆるやかな登りの道や風薫る  
 帰り道指に残れる木の芽の香  
 雨ふくみ一夜で牡丹崩れけり  
 鶯や小高き丘に師の寢墓  
 箸使ふ指につきたる露の灰汁  
 轉や朝日射し込む椎大樹  
 丁子屋の屋根新しく夏に入る  
 目薬師のみくじは吉と青葉風  
 霞みたる街六階のラウンジに  
 もてなしの鯉の甘露煮端午の日  
 ナースより薔薇のカードや誕生日  
 黙祷で始まる会や花の雨  
 絵手紙の眩しき余白夏に入る  
 鴉の巣確認済と電柱に

松永 和子

吉田 明美

菊山 静枝

坂本 操子

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

新川 晴美

神尾 知代

巫女の舞ふ指の先まで若葉風  
 雨催ひ土手すれすれにつばめかな  
 一人居に届く豆飯夕の風  
 川石に乾き艶増す桜えび  
 雲雀野やジーンズの師の若若し  
 明易しナースの声の筒抜けに  
 抱き合ふ古き羅漢や若葉風  
 初夏の富士に笠雲大きな

樟ヶ谷句会

No. 153

H・30・5・24

(神尾知代報)

母の日やややの写真と花束と  
 庭隅に埋むるつばめの子の骸  
 足強きプールの赤子水しぶき  
 いつの間に昼寝となりぬ句作中  
 結婚記念日夏めく空に夫の声  
 豆飯の折ににこにこ良き男  
 助っ人の若き三人溝浚  
 雲海の上の晴天富士眩し  
 男言ふ水割りに良き岩清水  
 野仏の胸を這ひをり蝸牛  
 黒揚羽東司修理の真つ最中  
 生命線見せ合ふ二人夏来る  
 ピザ窯を囲み乾杯若葉かな  
 美術館出でて薄暑のカフェテラス  
 水色のカーテン揺らぎ夏来る  
 兄危篤車窓に雨の朴の花  
 詩集みな兄の青春窓若葉

大村 泰子

磯田なつえ

花村富美子

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

中村いく代

塩瀬 初子

磯田なつえ

薫風や鯨新しき城仰ぐ  
久闊を叙す木曾川の早鮎食み  
竹の秋水琴窟の遠き音

中村 たか

(下河辺美乃里報)

かんがるー句会 No. 117

H・30・5・10

西川満寿美

師と拝す五百羅漢や花あやめ  
揚雲雀遠富士望む滑走路

離陸機を見遣る夏野に寝転んで

日暮れても強き香りの躑躅かな

みどりの日河原で遊ぶ子等の声

採りたての筍茹づるドラム缶

図書館の溢るる光夏の午後

武器飾る横目でちらと反抗期

旧友と尽きぬおしゃべり青葉風

集落の丘に一棹鯉幟

猫まんま狙つてをりぬ春の蠅

しゃぼん玉子らの喚声弾け飛ぶ

就活の戦況語る目に若葉

風薫る川に浸せる白き足

葉桜や醬油たらしてチーズ茄子

春暁や山の端に浮く白き月

待ちわびし新茶の香り口に満つ

すれすれに交叉するバス葎狩

百千鳥背を押され行く登り道

初鯉捌くこの腕土佐仕込み

制服のネクタイに慣れ桜実

富士の雪少なしを言ひ春惜しむ

大方は摘み終へ八十八夜かな

番町句会 No. 59

H・30・5・18

前田 恭子

刈り取りし山積の茶葉熱もてり  
びつしりと紫蘇の芽生えや畑の隅

仏壇に夫と剥きたる豆の飯

薔薇園に皇族のバラ香の深し

蒲公英の群れ咲きみたり峠道

老鶯のひと声墓の裏山に

新茶酌む夫婦茶碗の萌黄色

さくらんぼ目で母探す寝起きの子

息荒き添ひ寝の赤子明易し

相棒を待ちて将棋や夏木立

子に持たすほどよき味の苺ジャム

ベランダでカレーライスや夏燕

母の日や家族揃ひて外食に

梅の実はいりませんか朝電話

大輪の薔薇垂れにけり朝の雨

街中の狭き流れや通し鴨

母の日や遠く跳ねたる母の爪

茉莉花を一輪挿しに朝の窓

父に似るぶ厚き眼鏡更衣

実桜や久々に聞くややの声

磯田なつえ

山本 法子

(前田恭子報)

渡辺 公美

小林 智子

中村いく代

杉山 美波

勝又 寛樹

塩瀬 初子

磯田なつえ

(小林智子報)

レモン俳句教室 No. 38

H・30・5・8

白き手の母の突出し心太

松永 和子

日を返す小さき背よ天道虫

鯉のぼりつかまり立ちの子の一步

池村 明子

ほの甘し河原に貰ふ桜蝦

手の平に二尾や干場の桜えび

西川満寿美

河鹿笛風よく通る茶園かな

茶刈り機の刃のすぐ先や天道虫

前田 恭子

薫風や畑に座して小休止

青空を写す水田や若葉風

八木 洋子

遠来の客待つ座敷柏餅

天道虫抱つこの嬰の肩先に

斉藤真理子

青空に声やひばりの姿無し

クールビズの青き貼り紙五月来る

榎戸万里子

柿若葉掌に乗せ豆腐売り

急流の河口の広し揚雲雀

磯田なつえ

桜えび乾く匂ひや風にのり

◇兼題「心太」「天道虫」で作句。(物を通して詠むについてを読む)

(前田恭子報)

向日葵句会 No. 32

H・30・5・9

隊列の消防服に春落葉

土本かず子

色ちがふ蝶もつれ合ふ神の庭

打水の跡や大観墓所

橋本 紀子

飛び石に朱の病葉重ね落つ

新緑の鎮守の森に鳥さわぐ

佐藤 博子

背丈越す茶畝の裾や太わらび

源流を訪ぬる旅やみどりの日

下河辺美乃里

石積の胞衣塚しんとつつじ咲く

青芝に笛鳴り響きキックオフ  
猫の保護記す貼り紙若葉風

清和なる極彩色の大社

緑蔭や茶園開墾頌徳碑

荒海の風にあらがふ武者絵風

ローカル線僧春眠の大いびき

多々良和世

立川まさ子

坂本 操子

静岡同人句会 No. 88

H・30・5・5

まなかひに光る大富士花みかん

喜寿の宴友手作りの心太

磯あそび尺の高さの波寄する

茶を摘むや母子の会話近くなる

ジーンズの師の歩軽やか五月くる

ふつくらと青き実一つ臥龍梅

富美子

法子

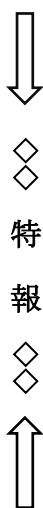
操子

たか

恵子

なつえ

(山本法子報)



静岡句会 栗田やすし顧問ご指導

☆日 時 七月三日(火)午後六時一五分

☆場 所 番町市民活動センター大会議室

☆ご指導 栗田やすし顧問

☆投 句 三句(6/26迄に山本法子へ葉書で)

☆清記集を当日五時四十五分以降に会場で配布するので、選句を句

会前に済ませること。

☆幹事・世話人 山本法子 花村富美子

# 静岡句会 No. 1

H・30・5・1

栗田やすし先生、せつ子先生をお迎えして、句会横断型の第一回静岡句会が番町市民活動センターにて行われました。参加者二十五名。

## 作品

栗田先生入選句○(㊤はせつ子先生入選)・選評

○古里の若葉萌え立つ雑木山

佐藤 博子

・古里や母はイメージを共有しやすい。中7以下で古里を具体化している。

○食卓に父の土産の蛭烏賊

松本 恵子

・父(共通のイメージ)。ものは「蛭烏賊」。情の句である。

○夕空へ穂先をツンと麦青む

松永 和子

・ツンが写生、麦の本質をとらえている。感性の句である。

○青空へなんじやもんじやの波打てり

花村富美子

・「波打てり」が花の特徴を表している。写生の効いた句。

○㊤吊り橋を吹き抜くる風春寒し

立川まさ子

・上5中7で「春寒し」を捉えている。感性の句。

(春寒し水田の上の根無し雲 碧梧桐)

○一人静水音高き谷の道

下河辺実乃里

・一人静は地味な花、水音を捉えた聴覚の句。

○朝食に友手作りの木の芽和

池村 明子

・友が良い、これによりイメージが出来る。

○㊤藤房に藤房の影揺れや止まず

中村 たか

・藤房に藤房の影を見つけたのがよい。写生が効いている。

○㊤曲がるまで見送る母や花菜風

漆畑 一枝

・上5が母の優しさ、花菜風がよい。

○夕映えの柵の家並燕来る

藤田 幸子

柵は防火壁。家の格を示す。品格ある家並と燕有松の景か？

㊤青饅の少し甘めや母の味  
㊤夕暮れの鐘の余韻や山桜

多々良和世  
山本 法子

富士を背にまなかひに伊豆袋掛

磯田なつえ

砂浜の枝を拾ひて巢組鷺

伊坂 壽子

手をつなぎ老ひた二人の桜狩

大石ひさを

春の川光りをのせて踊らせて

片井 克子

春昼や水面に丸き鯉の口

大森 弘子

大空の凧の手応へ子に渡す

坂本 操子

春水の流れの速し神田川

橋本 紀子

やはらかき赤子の髪に花の片

齋藤真理子

街道を春光浴びてツーリング

土本かず子

さみどりの茶畑の小道ペダル漕ぐ

西川満寿美

神主の祝詞通るや若葉風

前田 恭子

医院跡庭に盛りのオキザリス

佐藤 ハル

花御堂公園の子の輪の中に

八木 洋子

茶の新芽噛んで摘む日を決めにけり

栗田せつ子

風木舎に通ひしことも春の夢

栗田やすし

△幾すじの真青の空や糸柳(理に走っている・糸柳とはそういうもの)

△春昼や水面に丸き鯉の口(常套句・寄り来る⇨動きを見せたい)

△寄す波のごと迫り来る山若葉(ことは比喩・共感を得られなかった)

△永き日や柱時計の止まりをり(たまたま?季語に託す心が見えな)

△山上の堂に二度目の花見かな(二度目が曖昧・数詞は難しい)

△茶柱や恙なき朝さくら草(線部分、物が二つなので一つに)

## 〔比喩について〕

Aの語をBに言い換える。近いと月並み、遠いと解りにくい。

距離が大切。・美しき距離白鷺が蝶に見ゆ

☆誓子に見る例・伊吹山みみず金輪となりて死す

・伊吹山他山に雪を分け惜しむ

・鮎に張る鶴翼の陣下り簾

(法子・なつえ報)

## 私の一句

池村 明子

### 出産の知らせ受くるや星涼し

明子

昨年七月、私達夫婦にとって五人目となる孫が誕生しました。男の子でした。

娘は仕事を持っていて、しかも十年振りの妊娠という事で、喜ばしくもあり心配でもありました。しかし、本人は前向きに捉え、仕事に家事にと取り組んでいました。また、姉となる二人の孫も大喜びで、早々に名前を考えたり、自分のことは自分でという意識を持つようになり、母親の身体を気遣ってくれました。

産み月に入り、少し早めの入院が決まりました。

孫二人と家で吉報を待つことにしました。

夜遅くなって無事出産し、「母子共に元気だよ」との知らせを貰い病院へ駆け付けました。

その夜は空気が澄んでいて、町の中でも星がきらきら輝いていて、子の誕生を祝っているように思われました。

その後

夜濯や赤子の泣くを聞きながら

初笑齒の生え初めし子を膝に

鯉幟つかまり立ちの子の一步

などの句が出来ました。

あと一カ月もすると誕生日を迎えます。

これからも子の成長を見守りながら、子供たちの俳句を、祖母の目で詠んでいきたいと思えます。

## 空色のたまご

多々良 和世

四月中旬、朝まだ明けやらぬ内から二階に寝ている私の耳に、騒がしい鳥の鳴き声が聞こえた。よく鳴くなあと外を見ると電線に止まりじつとこちらを見ている。雀よりひと回り大きくて灰褐色、くちばしと脚は黄色。椋鳥だ。椋鳥は日本各地の人家付近の樹林や田んぼに群れなして、椋の実や昆虫を主に食べ、夏の終りから冬にかけて夜間に大集団で共同ねぐらをなして眠る。まことに賑賑しい鳥である。

そんな日が続いたある日、夫が「戸袋に巣を作っているぞ」と言う。覗いてみると、奥までいっぱい枯枝、竹の枝、笹の葉、藁屑など敷き詰めて立派な巣が出来ている。びっくりである。我が家では以前ペランダに鳩が二年続けて巣作りし、二羽ずつ巣立ったことがあり、珍しくて、経過を写真に撮ったことがあった。翌年も同じ場所に巣作りした。しかしその後の糞やら散らかった巣を片付けるのが大変だったので、椋鳥の巣は早いところ片付けてしまおうと思った矢先、覗いてみるとなんと卵を五つ産んでいた。鮮やかな空色、トルコ石のターコイズブルーだ。直径三センチ位、復活祭のイースターエッグのようだ。巣は片付けることが出来なくなってしまう。

それからは親鳥の警戒がすごい。カーテン越しに見ていても、パツと飛び去り電線や屋根の上からじつとこちらを見ている。親鳥の巣を守る姿勢に感心する。これから三週間位で巣立ちするらしい。無事に巣立つ姿を見られるだろうか。そんな毎日である。

## 空色の小鳥のたまご戸袋に

和世

「一番茶」作品鑑賞（三月号）

坂本 操子

花辛夷動きそめたる四方の山

菊山 静枝

辛夷は葉に先立って木蓮よりやや小振りの花を開く。この花が真白に咲くと春が来たことを実感する。その頃に四方の山々の芽吹きが一斉に始まる。その感動を動きそめたと表現して静かな中の躍動感が伝わります。

焼け跡のヒソヒソ話春寒し

榎戸万里子

昨夜の火事の焼け跡に近所の人達が集まっていた。中には燃え盛る火の粉を浴びた人もいた。火事の凄かった事、原因は何であったのか、親しかった家族の安否を気遣うなど声高で話すことでは無い。句材は重いヒソヒソ話に俳階味があり、春寒が利いています。

木の芽どき一年鯉に模様浮く

佐藤 博子

一年を経た鯉に模様が現れてきた。それが発見であり感動だ。澤木欣一先生は俳句は認識の詩であると書かれていた。季語の木の芽どきが言い得ています。

進路決めドラム打つ子や二月尽

山本 法子

少年期は思考が青いそれ故に感情の起伏が激しい。家族も心配していた。不安一杯に過していたが、やっと決まった進路に少年は喜びをドラムを全身で叩いて表現した。坦々と延べて生活の過程も見える膨みのある句となった。二月は卒業期二月尽が動かない。

父亡くて八十年や霾れり

中村 たか

父逝きてでは無く、父亡くてで意味が深くなった。お父様が亡くなられたのは八十年前、たか様が五歳の頃、ご兄弟は三人。下の弟はみどり児だったとかお母様の並々ならぬご苦勞を推察します。芒八十年の歲月。季語の霾が絶妙です。

☆☆☆☆あ と が き☆☆☆☆

植木鉢のアマリリスが見事に咲いてくれました。

今月から始まった栗田やすし先生による静岡句会は、会員二十五名が参加となりました。

今回はせつ子先生もご参加くださり、有意義な句会となりました。季節の変わり目です。体調に気を付けて次回も元気に出席出来るようにしたいものです。  
(博子)

平成30年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵（新聞）	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅（羽鳥）	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵（新聞）	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵（新聞）	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
静岡岡	第1火曜	番町市民活動センター	18時15分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵（新聞）	13時

一番茶句会報 5月号（592）

平成30年5月31日 発行

発行責任者 磯田なつえ（☎054-278-7443）

〒421-1201 静岡市葵区新聞458

編集部 山本 法子（部長） 中村たか（校正）

操子・美乃里・博子・明子・和世

印刷 番町市民活動センターにて印刷